

先人から学ぶ医療職の姿

——ナイチンゲールとマザー・テレサを教材として——

福沢 節子*

* 帝京短期大学 ライフケア学科

要 旨

本学「看護学概論」の授業で、臨床検査技師を目指す学生に必要な、偉大なる2人の先人を教材として、DVDをも用いて、医療職に求められる責任感、ケアのこころ、コミュニケーション、患者への接遇・対応などを学んだ。授業後の、学生の純粋で素朴なレポートを紹介し、その内容について報告する。

キーワード：偉大なる先人、ケアのこころ、接遇・対応

I はじめに

1. 授業にあたって

私は本学臨床検査専攻の『看護学概論』を担当して6年となった。担当した当初は、学生たちからは、「なぜ看護学概論を学ぶのか？ 看護師になるのではないのに……」という疑問が多く出されていた。しかし、昨年度からカリキュラムが変わり、基礎教育科目においても、コミュニケーションについて学ぶことが求められるようになってきた。そして、このような疑問は少なくなり、自分の専門領域のこととして学ぶようになっていく。

高校卒、最少年齢18歳で医療職の臨床検査技師を自分の将来の職業として選んだ学生たちは、すでに国家試験を意識しており、真剣でとても授業態度が良い。私語など全く無く、教室には緊張した空気が保たれており、講師の私の話しは吸い込まれるように入っていくのである。

2. 学生のレポートからの触発

講師の私もまた、臨床検査技師を目指す学生が学ぶ看護学概論とは、どのようなアプローチがふさわしいのか模索してきた。そして、授業の主体は、看護師でなく臨床検査技師に置きたいと考えてきた。そこで、医療職全体に尊敬を集めている、看護の先人とケアの偉大なる先人を教材として取り上げてきた。輝かしい功績をあげ、その生き様や姿から学ばせていただく人としての、フローレンス・ナイチンゲールとマザー・テレサである。つまり、彼女たちが成し遂げた功績を学ぶことは、看護職に限定することなく、医療職であれば、どの職にあっても共通の学びが可能であろうと考えたからなのである。

例年、学習後の学生たちが記述したレポートを読むと、私ひとりが読んでいるのが惜しいような気持ちになる。そこには、純粋な素朴な感想が綴られている。入学して間もない、医療を目指したばかりの時期にいて、役割を模索している学生の気持ちが読み取れるのである。それを、エッセイ風にまとめたいと思ったのがきっかけである。要するに、学生の学びと記述文の真剣さに触発されたということである。

II 授業の目的・目標

平成29年度講義要項によって説明する。

本科目『看護学概論』は、入学当初4月から開講している『パーソナルコミュニケーション』（15時間）をふまえて、5月下旬から授業開始としている。1年次前期設定科目：15時間（2クラスに分割授業）である。したがって、コミュニケーションについては白紙の状態ではなく、基礎や必要性について多少の理解はしている状況である。

1. 授業の目的（講義要項より）

- (1) 看護学の対象である人間と、生活している社会や環境について、理解を深める。
- (2) 看護の概念やライフサイクルにおける発達課題について理解し、健康問題について考える。
- (3) 看護の役割・機能について理解し、臨床検査技師と看護師との連携について考える。

2. 授業の到達目標（講義要項より）

- (1) 医療・保健・福祉チームのメンバーである臨床検査技師として、看護学を通してケアについて学び理解する。

(2) 医療・保健・福祉の専門職として、接遇・対応について学び、基本的なコミュニケーション技術を習得する。

3. 授業のねらい

講義要項の授業計画の中から、本テーマのポイントとする事柄について触れておきたい。

ケアやコミュニケーションについて、その基礎を学ぶということは、ハウツウとして、表面的に解るものでなく、マニュアルを身につけることでもない。その土台となる「医療・保健・福祉の専門職としての態度」というところに立脚しなければ、学生は学べないし、教師は語れないのである。つまり、パーソナルコミュニケーションから進んで、専門的知識に基づいた目的を持った意識的な人間関係なのである。それは、対人援助職に共通に求められる基本である。その観点から、「フローレンス・ナイチンゲール」と「マザー・テレサ」は医療職として求められる姿を学ぶための何よりの教材であると考えたのである。

端的に言うと、ナイチンゲールは、看護を科学として確立した「近代看護の創始者」であり、広く統計学や数学などにも秀でており、後世に影響を与えている。そしてナイチンゲールに教育を受けた弟子たちが、全世界に散って、看護を発展させてきた。私もまた、弟子の一人と思っているのである。

もう一人の先人であるマザー・テレサは、目の前の苦しんでいる人を抱きとめるところから始めて、世界中の人々から支持を得て、愛を運ぶ人として敬愛された。書籍を著すことはなく、ひたすら目の前の人に献身した行動の人である。私は、存在そのものが救いであり、この世の宝であると思っている。私自身が、一歩でも半歩でも近づきたいと思える福祉の人である。

どちらも、健康障害や貧しいために苦しんでいる人（他者）のために、困難を乗り越え、ひるまずに前に進む姿から学ばせていただきたい先人なのである。私もまた、学生と一緒にDVDを観るが、何度観てもところが打たれ、胸がいっぱいになり、涙ぐんでいるのである。

III 先人の人物像

1. フローレンス・ナイチンゲール（1820－1910）の人物像

英国の看護師。1854年クリミア戦争に際し、特殊看護婦を率いて野戦病院で活躍。帰国後、看護婦養成のためのナイチンゲール・ホームをはじめ、多くの病院・施設の開設や改善に努力し、近代的看護技術の開拓者となった。1920年彼女の業績を記念してナイチン

ンゲール記章が制定され、隔年に国際赤十字委員会から各国の功労ある看護師に授与されている。

彼女は、劣悪な環境の野戦病院での貢献が高く評価され、「クリミアの天使」や「ランプを持った貴婦人」と伝えられている。また、大きな功績は、看護教育に対する基礎を作ったことであり、それは「ナイチンゲール方式」と呼ばれている。多くの著作を著し、医師の治療とは別の看護を科学的に確立した¹⁾。

「フローレンス・ナイチンゲールの看護の定義」ともいえる有名な言葉をあげておく²⁾。

「看護とは、新鮮な空気、陽光、暖かさ、清潔さ、静かさを適切に保ち、食事を適切に選択し管理すること——こういったことのすべてを患者の生命力の消耗を最小にするように整えることを意味する」

2. マザー・テレサ（1910－1997）の人物像

1910年8月、現在のマケドニア（旧ユーゴスラヴィアの首都スコピエ）の裕福なアルバニア人家庭に生まれる。本名はアグネス・ゴンジャ・ボジャジュ。18歳で修道会に入会。21歳からカルカッタのハイスクール教師。27歳から学校長。37歳でヒマラヤのダージリンに行く途中「神の声」を聞く。38歳でカルカッタのスラム街に入り、救援活動を始める。40歳でインド国籍を取得。このころからマザー・テレサと呼ばれる。活動は、貧しい人、孤児、障害者、死を待つ人などを支援し、世界中に及んだ。69歳でノーベル平和賞受賞。87歳で死去（1997年9月5日）。

私の教え子の介護福祉学生の一人が、私の授業で紹介したのがきっかけで、その活動に感動して、マザー・テレサのインドの施設に研修に行ったことがあった。その施設には全世界から研修生が集まってくるのである。たまたま、マザーは不在であったが、まず「微笑みなさい」「触れなさい」と教えられたと言っていた。

IV 授業の実施・結果・倫理的配慮

1. 授業の実施

授業の進め方としては、テキストなどで概略説明をした後、映像で、活動している姿を観た。その行為や功績を直接に感性に訴えることができるように、専門的でないDVDを選択した。NHKや民放の過去の放映を録画したものである。それぞれ、1コマを用いた。

フローレンス・ナイチンゲールについては、授業中の視聴の場面では、感嘆の声が漏れた。その勇敢な、使命感に裏打ちされた行動に、驚いたのである。特に、飛行機など無い時代に、何十日もかけて船でクリ

ミア半島に赴き、ヘトヘトになりながら、「これで仕事ができる」とわくわくとして、上陸したことなど、学生には信じられない行動力であった。また、裕福な家庭に生まれながら、なぜ、親の大反対をも押し切って怖いところに自ら行くのか信じられない、という反応であった。

マザー・テレサについては、授業中の視聴の場面では熱心な態度で、釘づけのような雰囲気となった。交渉ごとをする時の鷹のような鋭い眼、節くれだった手、赤ちゃんの頬をなでる時の微笑みなど、変化する表情をよく観察していた。

2. 学生の感想文

視聴した直後に10分間で感想を記述させた。本稿の学生の記述文は、原文をそのまま転記したものである。掲載に当たっては、実名を明らかにしていない。しかし、研究上の倫理的配慮として、学科と学生本人から了解を得ている。本稿に用いた学生5名それぞれから快く承諾を得ることができた。

(1) フローレンス・ナイチンゲールの説明とDVD (30分視聴)

[学生A (男)] の感想文

クリミア戦争で、傷ついた兵士の看護を行い衛生の問題を改善したナイチンゲールは看護だけでなくこれからの教育のありかたを見たりして、多くの功績を残してきた。当たり前のように入院中に思っていた病棟のベッドやナースコールなどナイチンゲールから始まったことを知り、驚いた。訪れた国や場所のコンディションが悪く、このままではいけないというナイチンゲールの強い意志からたくさんのアイデアで行動を起こした。

たとえば、看護師の仕事を増やしたり、衛生的な問題点などの要望を手紙で医師に送ることもした。傷ついた兵士だけでなく遺された未亡人の看護などでもして、死亡率を自らの力で下げたことで、とても多くの人から圧倒的な支持を得たのではないかと思った。イギリスからトルコなどさまざまな国を渡り、活動できたのは、看護精神だけでなく、言葉では伝えきれないほどのポテンシャルをもっていたんだと感じた。医療従事者として最も尊敬すべき人物のひとりであり、ナイチンゲールの功績を知らなければ、恥というくらいの人物だと思う。

海外に出る機会があったら、ぜひともフローレンス・ナイチンゲールミュージアムに触れてこれからの人生の財産にしたい。更にナイチンゲールへの興味がわき、また調べたいと思える良い時間でした。ありがとうございました。

(2) マザー・テレサの説明とDVD (45分視聴)

[学生B (女)] の感想文

どんなに汚れている人でも嫌がらずに助ける姿が印象的だった。マザー・テレサ自身は裕福な幼少期を過ごしていたはずなのに自分の欲を捨て、貧しい人達へ尽くしているところはなかなかまねできないところだと思った。また、心の飢えに対するケアもしていたことを初めて知った。人々に優しく手を差し伸べ、頬をなでたり、手をたたき、マザー・テレサ特有のコミュニケーションに魅かれるものがあった。人々がマザー・テレサを慕う理由はこの親しみやすいコミュニケーションから来るものだと感じた。

神への愛や、隣人への愛などとても愛を大切にしている人で、心が美しいなと思った。道端に倒れている人へも「なぜこんなことを？」と言う問いかけに対して「あなたを愛しているから」と答えていてとても心に残った。DVDを観ているだけで本当にマザー・テレサの人々への愛情が伝わってきた。たくさんの活動で、多くの人を助けてきたにもかかわらず、マザー・テレサは援助を請うことはしなかったことに驚いた。マザー・テレサたちが困る前に周りからの支援があり、彼女たちは愛をあげるだけでなくたくさんの愛をもらっていることに感動した。死を待つ人の家や孤児の家でマザー・テレサと接している人たちがとても幸せそうに見えた。

V 課題レポートから

本科目の評価は、平常評価と、8コマの授業終了後の課題レポートとで、総合的な評価とした。

レポートの課題としては、到達目標に対して、「ケア」「接遇・対応」「連携」などについて、自由に記述するものとした。提出されたレポートはいずれも力作であったが、それぞれ、1年生らしい素直で素朴な内容である。

本稿では、3名の学生のレポートを部分的に取り上げる。それぞれボリュームがあり、全体(全文)を取り上げることはできないが、それが残念なほどの優れたレポートである。

[学生C (女)] のレポートから (抜粋)

- * 臨床検査技師をめざす者として看護学概論から学んだ「ケア」とは。「ケア」それは眼には見えないもの。しかし、「ケア」は患者の心とからだを健康にすることのできる大きな力を持つものである。
- * 患者との人間関係は、コミュニケーションが成り立っていないと、良い「ケア」へと繋げることができない。そのため、コミュニケーションはすべての医療従事者にとって大きな核である。言語

的コミュニケーションも大切であるが、やさしく微笑むなどの非言語的コミュニケーションは、患者に対し安心感を与えるものであり、特に重要なものであると思われる。

- * 患者の気持ちを無視し、自分の仕事が終わることを優先しては、信頼関係は作れないと思う。

[学生D(女)] のレポートから (抜粋)

- * 臨床検査技師はチーム医療の一員です。私たちは、医師や看護師が、迅速に患者に対応できるように正確な検査データをすばやく提出することが求められてきます。また、専門的な、知識と技術を用いて他の医療従事者と連携していきます。症状だけで病名を診断するのは難しく、さまざまな検査データが必要になります。これからの、医療の進歩のために、多くのことを学び、技術面でも、精神面でも、優れた医療技術者となり、質の高い医療を提供していかなければなりません。

[学生E(女)] のレポートから (抜粋)

- * 私が一番印象に残っているマザー・テレサの言葉は、「誰のためにしているのかということをおぼろげに忘れると、それが落とし穴になるのです。という言葉です。」この言葉は、臨床検査技師にも当てはまり、そして、今の私にも当てはまると思います。だから、将来私が臨床検査技師になったら、この言葉を忘れずに仕事に励みます。また、今、誰のために大学に通って勉強をしているのか、これからはそのことも考えて勉強します。
- * 「ケア」には、人それぞれのやり方があります。臨床検査技師では、ちょっとしたひとことが、ケアになります。たとえば、血液採取時アルコールを使う前に、目を見て「アルコール大丈夫ですか」と微笑みかけて尋ねたり、検査が終わったら、「お疲れ様でした」「お大事にしてください」など一声かけることで患者さんにとってケアとなるでしょう。
- * 私は、「ケア」や「チーム医療」について学んだことを糧にして、患者さんや医療従事者に必要とされる人になりたいと思います。

VI まとめ——学生への私の期待——

学生には、臨床検査技師の専門性を認識し、さらに探求しつつ学んで欲しいところである。しかし、1年生前期には、そこまで要求するのは酷なことかもしれない。私が強調したいのは、医療職はすべてケアの担い手であり、ケアの心を兼ね備えている必要があるということである。一方、看護師は、ケアそのものが専門性である。そのためにも看護師との連携は重要であ

る。

臨床検査技師は、患者の検査という特殊な場面で、接遇・対応することがほとんどである。すなわち、クライシスともいえる場面で、突如として対面して対応するため、高いコミュニケーション能力を要求されることが多い。つまり、患者は、苦痛を伴う、未知の検査に挑まなければならない過緊張状態の過敏な人間である。たとえば、からだに入る太い管を初めて見た時の驚きや、状況によっては、いのちの恐怖にさいなまれている場合もあると思われる。

今や、医療の日進月歩の発展によって、医療・保健・福祉チームメンバーの中の臨床検査技師の役割は拡大している。専門性としては、「試験管」や「顕微鏡」を扱うことももちろん大切であるが、患者観、人間観を問われてくる時代である。「検査データを正確に早く提供する」という重大な任務には、「決して間違いが許されない」という重責が伴う。また、咽頭の分泌物の採取や生理的検査も担当することになり、そこには、患者の身になって苦痛を感じるができる、感性が必要とされる。

そのため、卒業後も一生をかけて自己学習し、自己成長することが求められる。しかしその点、現在では臨床検査技師に関しては、卒業後のキャリアアップや専門性については明確に認められ、すでに整えられている。その恵まれた状況を受けて、一層精進して欲しいと切に期待するところである。

さて次に、医療職は、高い倫理性と、生命に対して深い畏敬の念を持っておくことが求められる。もう少し括げて言えば、医療機関に足を踏み入れたその時から、患者は、守られなければならない。温かいケアと、適切な治療によって。そのためには、専門職だけでなく、玄関に入った時の、守衛さんから始まり、診察の受付をする事務職にもケアのこころは必要である。医療機関には、職員全体がケアのこころを持って患者に接遇・対応することが求められている。まして、専門職である臨床検査技師には当然要求されることである。更に言えば、それが無ければ、検査は単純作業になってしまう危険性ははらんでいるであろう。そのような対応からは、患者との間のトラブルや、事故に結びついていくこともあると考えられる。

しかし、専門的な学びは容易なことではなく、1年生の入学当初は、難解な言葉で講師が熱を込めて語ったとしても、どれだけ理解でき、こころに響くであろうか。そのことから、授業の教材として、感覚や特に視覚を用いて直感的に感じ取って欲しいと思ったのである。

「マザー・テレサ 日々のことば」³⁾ から印象深い

言葉を抜き出しておく。

4月3日

私たちのしていることは
大海の一滴にすぎないと感じています。
けれど、もしその一滴がなければ
海はその一滴分、確かに少ないということです。
私たちは数や量では考えません。

いつもその時たったひとりの人を愛しているのです。

どんな時でも、いつも
ひとりのその人に集中してお世話をしているのです。

VII おわりに

このような立派そうなことを書き連ねるのは、実は辛いことである。最後になってしまったが、ここで私の看護経験を紹介してみたい。50年前に看護学校を卒業した時の新人看護婦（現在は職名は看護師）であった私は、看護師として教科書どおりに糖尿病患者さんの食事を指導した。また、塩分制限の苦痛に耐え切れず、醤油を隠し持っている腎臓病患者さんの苦しみにも、思いやりの言葉もかけず取り上げたりもした。その行為そのものは正しいのであったが、ケアする者としての姿勢・態度はいかがなものであったか。医療職としての姿はそれで良かったのか。いや、こころが伴っていなかったのではなかろうか。振り返ると恥じ入る思いであり、まさに未熟であった。

学生達には、医療職としての姿のお手本として、フローレンス・ナイチンゲールとマザー・テレサからいただいたものを忘れずに、感性を磨き、たゆまず進んで欲しいと願いつつ本稿を閉じる。

簡単そうで、実は奥が深い、「コミュニケーション」や「ケア」について、そんな未熟な私もまた、学生たちとともに先人から学び続けたい。

文献

- 1) 志自岐康子 他（編） ナーシング・グラフィカ
基礎看護学① 看護学概論 メディカ出版（2017年）
- 2) フローレンス・ナイチンゲール 薄井坦子・小玉香津子 他（訳） 改訂新版 看護覚書 現代社（1976年）
- 3) ジャリハ・チャリハ & エドワード・レ・ジョリー（編） いなます みかこ（訳） マザー・テレサ 日々のことば 女子パウロ会（2000年）

Figures in History as a Model for Medical Personnel: Using Florence Nightingale and Mother Teresa as Teaching Tools

Setsuko FUKUZAWA *

* Department of Life Care, Teikyo Junior College

Abstract

Two preeminent figures in history serve as teaching tools in an Introduction to Nursing course taught at this University. The deeds of these figures are described and then DVDs are used to convey to students the qualities that medical personnel must have, such as a sense of responsibility, a caregiver's mentality, an ability to communicate, and the ability to interact and deal with patients. Course content will be described here along with student descriptions of the course.

Keywords : Preeminent figures, Sense of responsibility, Interact and deal